

柴田隆子（専修大学）

コロナ感染収束が見通せない今日、舞踊を含む舞台芸術で自明とされてきた身体の「共在 (co-presence)」や「現前性(presence)」に新たなフェーズが訪れている。身体によるノンバーバル・コミュニケーションとして舞踊は、ダンサーと観客とが同じ空間にあることを前提に、言葉や意味には収まらないものをムーブメントを通して伝えることを重視してきた。しかしながら、感染予防のために人が集まることが制限される中、新たな共在の場をオンラインなどの仮想空間に求める試みが行われている。本発表はそうした仮想空間にある「踊る身体」の可能性を、特に「声」の身体性に着目して検討する。

美学的な観点からのアプローチとして、カーチャ・シュナイダーは「ダンス・パフォーマンスは舞台だけでなく、コンセプトの枠組みや視覚的・言語的なパラテキストにも存在する」と述べ、現前するムーブメントだけでなく、そこでの文化的慣習に基づく「参照項」が舞踊の知覚に関与していることを指摘している (Schneider 2013)。本発表で検討する「仮想空間」においても、シュナイダーのいう、舞踊を知覚する様々な参照項が引き込む空間性が関与すると考える。声は意味を媒介するだけでなく、身体性や空間性を生み出すものである。声はそこにはない身体を創造空間に想起させ、その不在の身体がおかれた空間を想像することで、目の前に見える空間に別の位相の空間が重ねられるのである。

これまで作品レベルでは、声を音として用いた試みは数多く行われているが、「声」は一般に言葉や意味に結びつくものとして、舞踊研究の分野ではほとんど扱われていない。一方、演劇学は「声」は朗読術など言葉の意味や役柄を伝える観点からの研究が伝統的に主流であったが、1990年代のメディアアートの隆盛以降、声の空間性や身体性が言及されるようになってきている。ハンス=ティース・レーマンは、声は生身の演者の身体性を想起させながらも、メディア空間の中では声は人物=主体から切り離され、身体なき「場違いの声 (deplazierte Stimmen)」として存在し、声を意味から切り離し、音が呼び込む記号を「声の身振り」として捉えることで「客体としての主体」をみることができるという (Lehmann 1999)。エーリカ・フィッシャー=リヒテは「声は性別、年齢、エスニシティの帰属性などを示すような特徴を失う」ことで、「声が生み出す聴覚空間は絶えざる移行、通過、変身といったリミナルな空間として経験される」と述べる (Fischer-Lichte 2004)。こうした

観点からみると、物質としての身体が不在となる仮想空間では、文化的慣習を引き込みつつも帰属性の特徴からは自由になれる「踊る身体」を想起することが可能であると考えられる。

本発表では、観客とパフォーマーの共在やパフォーマンスの現前性が、新たな仮想空間ではどのように構築されているのか、そこでの「踊る身体」はどのように構想されているのかを、コロナ禍以降の以下の事例から検討する。

①篠田千明『5×5×5 本足の椅子』山口情報芸術センター

②アユ・ペリマタ・サリ × 遠藤麻衣『プレッシャー？異なる肌をまとって』越境型移動舞台芸術祭 Creators's Cradle Circuit 2021 Tokyo

③『Moshimoshi City』（中間アヤカ）京都国際芸術祭

①はアンナ・ハルプリンのダンス作品『5本足の椅子』（1962年）のダンススコアをもとに、スタジオと自宅の中継映像をインターネット上に結び、レクチャー付きで上演された。アバターでの観客参加の場も用意され、オンライン空間での共在、現前が試行される。②はタイと日本をつないだズームによるオンライン対話に始まり、場所を野外とそれを映したスクリーンの前に移し、それぞれのダンスの模倣を行う。前半の声が引き込むそれぞれの文化が、後半の踊る身体に重ねられる。③は京都の街並みの中でスマートフォンによる音声を再生して聴くことで、土地の風景の中にイメージとしての身体を立ち上げ、そこでのパフォーマンスを観客=聴衆の中に立ち上げるものである。

上記事例の問題点としては、「共在」を感じるには観客=聴衆の通信速度やPCなどの機器の性能に左右される点、また実際の舞台作品に比べると空間を多層的に配置できることから、引き込まれる身体性や空間性が舞台上演に比して多くなり、観る側がその情報を読み解けない、あるいは消化しきれない点が挙げられる。しかし、こうした試行段階の問題点はあるとはいえ、これらの事例は、舞踊概念の拡張につながる興味深い実践だといえる。

【文献】

Lehmann, Hans-Thies (1999) *Postdramatisches Theater*, Autoren.

Fischer-Lichte, Erika (2004) *Ästhetik des Performativen*, Suhrkamp.

Kolesch, Doris (2005) „Stimmlichkeit,“ *Metzler Lexikon Theatertheorie*, Metzler, S.317-20.

Schneider, Katja (2013) “Unexpected Horizons of Meaning,” *Dance [and] Theory*, transcript, pp.115-8.